

特集 10年先の未来を考える

まちづくり町民ワークショップ「いなわしろみらい会議」が昨年10月からことしの1月まで、4回にわたり開かれました。今月号では、会議でまとめた提案内容を紹介するとともに、町の未来について考えます

いなわしろみらい会議って何？

猪苗代町の未来をみんなで考えるまちづくり町民ワークショップ、それが「いなわしろみらい会議（以下みらい会議）」です。昨年の10月から1回目がスタートし、ことしの1月に最終となる4回目が終了しました。広報猪苗代11月号から1月号までに、各回の内容を「かわらばん」として連載しましたが、ご存知の人もいると思いますが、今月号では4回目の会議で提案された具体的なまちづくり事業を紹介します。

第七次振興計画を見据えて

町のさまざまな行政計画の中で最も上位に位置し、町の施策の柱となる計画が「猪苗代町振興計画（以下 振興計画）」です。振興計画は、10年後の町の将来像を描き、それを実現していくための過程を計画化したものです。皆さんの日常生活ではあまり出てくることがない言葉ですが、役場ではこの振興計画に沿って日々仕事をしているといつてもよいくらい重要な計画です。

現在は、平成19年度からはじまり、10年後の平成28年度、つまり来年度を目標とする第六次振興計画が進行中ですが、残り1年で計画期間を終了します。

とする町の姿を、みんなで考える場として企画されたのが「みらい会議」だったのです。

いろいろな世代が参加

昨年9月に参加者を公募したところ、町内外から29人の申し込みがありました。そこに猪苗代高校の生徒3人と役員職員6人が加わり、メンバーは合計38人になりました。地元の高校生という若い世代の声が聞けること。役員職員と一緒にまちづくりについて話し合いができること。この2つを特徴とし、男性28人、女性10人、年齢は16歳から68歳まで、老若男女が同じテーブルで話し合いをする会議がスタートしました。

第1回（10月15日開催）では、まず事務局である役場企画財務課から会議の趣旨説明が行われました。その後、参加者の自己紹介を兼ねて「猪苗代をこんな町にしたい」という思いを互いに発表しました。意見を参考に、参加者の共通する想いをテーマ分けして「官民協働のまちづくり」、「農業の6次産業化」、「新時代の観光」、「福祉のまちづくり」の4グループをつくりあげました。



第2回（11月21日開催）では、朝から半日を使ってグループごとに気になる現場へ出かけ、町の現状を把握しました。町内のどこへ行くか、行程は各グループが決め、現地で昼食も一緒に食べました。

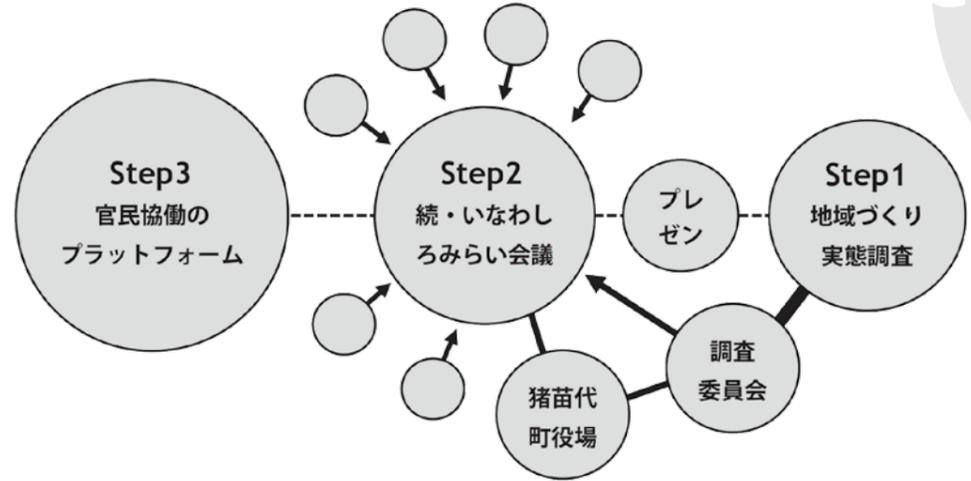
参加者からは「知っているようで知らなかった町の現状に気付いた」

などの感想が出されました。その後現場で調査した事実をまとめる作業を行いました。

第3回（12月10日開催）は、10年後の町の未来像を具体的に描くワークショップを行いました。テーマごとに、現状から何らかの手を打てば実現可能な未来像と、このまま何もしなければこうなってしまうという成り行き的な未来像の2通りを考え、発表を行いました。

【官民協働で活力ある猪苗代づくり】

「いなわしろみらい会議」はまだ続く!?
「LOVE♡いなわしろプロジェクト」



猪苗代には豊富な資源があり、さまざまな人々がいて、元気に活躍していることが分かりました。

官民協働のまちづくりを進めるには、そうした人々がゆるやかにつながり、互いに刺激しあったり協力しあったりできるネットワークづくりがカギになると考え、「LOVE♡いなわしろプロジェクト」を提案しました。

このプロジェクトは、まず行政にこの仕組みの構築を後押ししてもらい、地域づくり活動の実態調査やネットワーク組織の立ち上げ、誰もが集える拠点の開設など、一緒になって「猪苗代を愛する人々」をつなぎ、官民協働のプラットフォームをつくるというものです。

【INTERVIEW】



新明 哲也さん

【PROFILE】
本町在住。55歳。中央商店街で「新明家具」を営む傍ら、年代ごとの街並み地図を作成するなど、まちづくりに熱心な活動を展開

人口が減っても、みんなで知恵を出そう

みらい会議では、町の現状と町の未来のために何をすべきかということが明らかになりました。それらを踏まえ、近い将来には、政策的なNPOが誕生すれば素晴らしいと思います。

みらい会議のように、誰もが参加できる会議は、ある程度までいくと新しい意見が出なくなってしまう。

同じような形でこれからも続けていくのは難しいと思うので、今後は農業、観光、福祉など、それぞれの分野に詳しい人たちが集まって、町の将来について考えるのがいいと考えています。

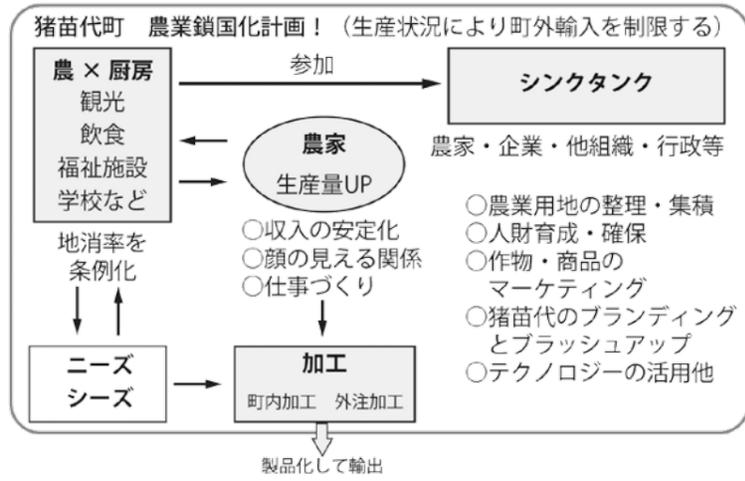
より進めるためには、こういった民間のグループと行政との連携が鍵になります。NPOは、その橋渡し役になれるのではないのでしょうか。

「町をもっと良くするためにはどうすればいいのか」。そういうことをあれこれ考えたり、話し合ったりするのは楽しいものです。そのようなグループが町のあちこちに広がっていけば、猪苗代が元気になるのではないのでしょうか。

人口の減少に伴い、考え方で貧困になってはいけません。人は減っても、みんなで知恵を出しあっていきたいですね。

【6次化で猪苗代を元気に】

「農業鎖国化計画！」
他の産業と連携し、町内自給率を高め、
農業ポテンシャルを高める。



みらい会議を通じて、猪苗代の農業の特性が浮かび上がってきました。作物の生育期間が限られている、観光と兼業して生活が成り立ってきた、穀物以外に猪苗代の特産といったものはなく、町民が地元の農産物をどこで売っているかを知らず、町内自給率もわからない状態です。

「農業鎖国化計画」という過激なテーマになりましたが、観光、飲食、福祉施設や学校など、農と厨房をマッチングし、町内で消費することで農業を支え、ニーズを探る。6次化につながる仕組みを作り、農業の可能性を高めていく必要性が見えました。

まずは現場の農家や多産業・他組織と行政が連携した組織の立ち上げを検討することから始めます。

【INTERVIEW】



佐藤 弘一さん

【PROFILE】
高森在住。35歳。吾妻食品取締役営業部長。仕事のモットーは「食卓に笑顔届けたい」。猪苗代青年会議所理事長

町の未来のため、みんなで力を合わせる時期

みらい会議のように、まちづくりに対する意見を発表したり、町を客観視したりする場というのは、なかなかありません。県外から猪苗代に移り住んだ人の意見を聞いたことも、私にとって新鮮でした。きっと、メンバーの皆さんも「必ず今後につながる」と感じていると思います。

私たちのグループは、農業の6次化について考えました。いろいろな人の考えを聞くことによって、今の仕組みの悪い部分や今後はこうしていくべきという未来像も見えてきました。

会議では、グループごとに違うテーマに取り組みつつも、みんな考え方は似ていて、すべて

官民協働を掲げていました。観光について考えたグループのテーマは、「積極的に外へ売り込む」ということで、私たちの「鎖国化」と相反するように思われるかもしれませんが、共通する部分が多くありました。町の経済を効率的に回すという点も同じです。

目指すところはみんな同じ。終着点は町を良くすることです。いま、そのためにみんなで力を合わせなければならない時期にきていると思います。

会議は終了しましたが、人脈をつなぎ、ゆるく、楽しく、猪苗代の未来を語る場がこれからもあるといいですね。



町企画財務課
課長 齋藤 憲郎

第六次猪苗代町振興計画の期間が平成28年度で終了するため、次期振興計画を策定することになりました。

しかし、誰もが経験したことのない少子高齢化が急速に進行し、日本のほとんどの地域で人口減少が問題となっている中、従来のやり方だけでは十分な対策を立てることは難しい。個人の意見を直接聞くだけでなく、皆さんが意見を交わす中でよりよい方向性が見出せないものか、と考えました。

ワークショップの参加者は集まるのか、意見の取りまとめは可能かなど、不安だらけの参加者募集でしたが、ふたを開けてみれば、若い人から人生経験豊富な人まで、男女比も大きく偏らず町外出身の皆さんも参加するなど、理想的な構成になったと思います。

ワークショップで議論され取りまとめた内容は、広報などでお知らせしたとおりですが、その過程では、目で見、耳で聞いて、あるいは体験して、といった現地調査なども行われたのです。

4回の開催ではありましたが、皆さんの真摯な取り組みや話し合いから、それぞれが充実感を得ながら参加されていることが感じられました。

最後には、もっとワークショップを続けるべきという意見や言ったからには実践すべきではといった力強い発言がありました。猪苗代には、町の将来について真剣に考えている素晴らしい人たちが、まだまだたくさんいるということをあらためて実感しました。

憲政の神様と言われた尾崎行雄は「人生の本舞台は常に将来にあり」と言っています。猪苗代町の将来は、困難はあるにしても決して暗いものではない。今回の経験を通して、そう思いました。参加された皆さん、本当にありがとうございました。



3月3日、はじまりの美術館では、みらい会議のメンバーが中心となり、町民プレゼン大会の開催に向けた打ち合わせをしていました。和気あいあいとした雰囲気の中、メンバーたちがいきいきと意見を交わします。近い将来、このような場面が、町のいたるところで見られるかもしれません。

続・いなわしろみらい会議のはじまり

みらい会議のメンバーたちは、それぞれが町について熱く語り、活発に意見を交わし合っていました。メンバーたちが真剣に、かつ、楽しそうに取り組むその様子は「町の将来はきっと明るい」と思わせてくれました。

今回みらい会議に参加したメンバーは、町民約1万5千人のうち、ほんの一握りでしたが、多世代が集まり、官と民が協働で一つの目標に向って話し合ったことに、これからの可能性が見えました。

町内には「みらい会議」以外にも、まちづくりについて考える団体やグループが多くあります。

他分野の組織や個人が連携・協働してまちづくりを考える場が増えて、今よりもっと多くの人たちが町の未来を思い描き、実践するようになれば、この町は、今以上に魅力的な町になるはずです。

すでに、みらい会議メンバーの一部では、これから取り組みについて話し合いが持たれており、新たな動きが始まっています。「何事も楽しくなければ続かない」。

みらい会議を取材して、今回のように、真剣に、しかし楽しく取り組みながら続けていくことが、まちづくりを実践していくためには必要だと感じました。

特集「10年先の未来を考える」
終わり